るが[5]，まだ両者の区別は今回の噴火においては確認されていない．

爆発音

噴火時の爆発音の伝播についてはその時の高層気象より計算した値と，実際に報告された内聴域外聴域とがかなりよく一致することは既に報告した[6]．

爆発音を火口より1，2km の近距離で聴くと，短時間の爆発音の後に引続いて数回，数十回の「ザッザッザッ」又は「ザアー」という弱い音がすることが多い．これは爆発により開口した後をやや強い噴煙が上昇する場合に生ずる前述の鳴動現象であると解される．

なお昭和31年1月25日には昭和火口の下方で，2月20日には中岳西方斜面で共に火口より1km ぐらい離れた地点において，かなりの爆発の中間に，すなわち前の爆発のすぐ後か，次の爆発のすぐ前かに鋭く「カラカラカーン」と響く，まるで2箇の金属塊を強く打ち合わしたような音が数回断続して聴かれた．音のする方向は空中よりでなく，地肌の向うでするが如くであり，又かなりの反響を伴うものの如く感じられた．この音が何であったかは今日になってもわからないが，所謂〝構造線〟に沿う地帯で聴いたことでもあり，あるいは地下空所内への岩漿またはガス塊の進入による音であるか，あるいは地下空所内で岩盤破壊が生じたための音かもしれない．単に爆発により南岳火口壁が崩れて，岩塊が底に転落しただけではあのような反響音を伴った高調子の音は生じないものと考えられる．

文　献

1. 福島孝治，他，1929：“昭和4年9月18日の浅間火山 II,” 地震 **1**,
2. 安井　豊，　：〝桜島噴火と異常聴域〟天気．**3**,
3. 松沢武雄，　：〝或浅間噴火の圧力の波〟地震．**6**,
4. 村内必典，　：〝昭和27年9月の明神礁噴火活動について〟地震 II, **5**.
5. 永田武，他，　：〝桜島噴火に伴う音響微動観測結果〟地震研究所彙報24号。
6. 安井　豊，　：〝桜島噴火と異常聴域〟天気．**3**,

書評

山地地理学

R・ピティ著　奥田彧・上野福男訳

農林協会　1955年12月刊，A 4　278頁 350円

ピティの Mountain Geography (1936) は，地理学界においては知らぬ人もない名著である．ところが残念なことに，昨今は絶版で，古本として手に入りにくいことでも有名であった．この書を訳本として，わが国にえたことは限りない喜びである．

最近，山地における降水量，気温の問題は水理気象の面で脚光をあびているが，これが第1章，第2章をなし，風・日射などがそれに次いで述べられ，植物・耕作限界・森林などが詳述されている．社会経済的な面では放牧地・土地利用・人口・政治問題・生活などが述べられている．

山地のとくに気候条件の分析は，いまから20年も以前ではあるが非常に深い．おそらく山岳気候をまとめて論じたものとしては唯一の書ではなかろうか．また，総合開発や，高冷地開発に関する諸問題を取り扱うにも，大層役にたつと考えられる．例はアルプスから求められていても，わが国の山地と別の山地について，決して論じているのではないことが，読むにつれ明瞭となる．山岳気象に関心をもつ研究者・役人・登山家すべて一書をそなえて，損はしないであろう．　（吉野正敏）

吉田順五著　雪の一生

B 6　64頁　（楡書房）　1957　¥ 150

本書は北方文化写真シリーズの一つである，表題でわかるように，雪の結晶の出来方，積雪の粒子の変化，スキーの科学などを中心として，写真により解説したものである。岩波の写真文庫とよく以ているが，カバーには天然写真で積雪の断面図が入れてあり美しい．

著者は北大，低温科学研究所の所長であり，さすがにみごとな写真が沢山に挿入されている．多くの解説と図が入っており，雪に関する一通りの科学が平意にとかれている．一般の人が読んでも，眺めても楽しい本，否写真帳である．

肥沼寛一著　火災の日本

B 6　169頁　（地人書館）　1957　¥ 200

本書はいろいろの角度から日本の火災にメスを入れたものである．序論，日本の火災の実体，火事はなぜ起るか，燃焼の条件，日本の気象，火災と気象，火災と季節，大火と気象，火災の長期変動，火災の対策の十章よりなる縦組になっており，おそらく一般の教養書のつもりで書れたのであろうが，一読した感じでは気象界ばかりでなく，消防関係の技術者にもよい参考となるものである．文献が省略されているのはそれだけにおしまれる．文献，資料の所在をあげておいたならば後進の研究に非常に役に立ち，学術書としての価値をより高めたであろう．

ともあれ，予報部長といういそがしい管理職にありながら，よくこれだけまとめられたものだと感心させられる著書である．火災に関する著書も多くあるが，一冊でこのように各方面から眺めたものは少ない，図，表も豊富に入っている．　（高橋浩一郎）